

フランス動物紀行

高橋正男

筆者紹介・栃木県出身。オオカミ、ニホンオオカミに関する文献、資料の目録づくりをしている翻訳家。哺乳類学会会員。主な訳書：「動物のかわりものたち」（共訳、八坂書房）、「ジェヴォーダンの人食い狼の謎」（東宝出版）、「狼と西洋文明」（八坂書房）、「オオカミと人間」（平凡社）、「狼と神話・伝承」（大修館書店）、「フランス語の動物語彙とその用法」（高橋書房）。現在、フランス語辞書編纂中。

ぼくは長年、一応フランス語で生きてきた人間であるから、一度はフランスの地を踏んで見たいと思っていた。体力に自信があるわけではないし、とりわけ冒険心があるわけでもないことなど、もろもろの条件を考慮した上で、動物好きのぼくではあるがアフリカやその他、野生の動物を見る機会がある地域ではなく、安心して旅行できるフランスを選んだ。

機上の人になったぼくは、一風変わった夫婦から興味のある話をきいた。

パリの郊外に、犬猫のための墓地があるということだった。あるということは聞いていたが、妻君の方が、だいたい場所を書いてくれた。ぼくはひそかに、いつか映画でみた愛犬の墓石の前で涙にくれる老婆の姿を思いうかべていた。これは絵になる光景である。こんな情景をぜひフィルムに収めたいものだ。

フランスに行ったら確かめておきたいことがあった。

パリにはアパルトマンの数だけ犬がいるという。バカンスになると都会の人は長期間、都会から脱出して、海や山へ殺到する。このさい、今まで飼っていた愛犬を避暑へ連れて行けない事情があるのか、捨てていってしまうということだが、それは事実なのか、ついでに夫妻に聞いてみた。どうも事実のようであった。バカンスの頃になると高速道路の傍の木々につながれた犬はおびたしい数に達するという。適当な頃を見はからって、役所の係員がその犬たちを回収するのだそうだ。

一方では愛犬の墓前で涙にくれ、一方ではくさりにつないで置き去りにするというフランス人の心境をぜひ確かめねばならない。こうして、ぼくのフランス動物紀行は幸先きよく始まった。

オルリー空港からモンマルトルのホテルまでの間、車窓からパリの街を見つめているうちに、ついにパリに来てしまったという感動にも似た思いがこみあげてきた。

車から見たパリの街はベールを被った淡い色彩の夢みるような街だった。しかし、歩いて見るパリの街は、人間と車がやたらに多く、排気ガスのおお活気に満ちた街だった。

モンマルトル付近は坂の街だ。目は自然に下の方にゆく。さきほどから少しずつ気がついてきたのだが、少しひどくなってきたようだ。それは犬の糞のことである。歩道にあちらにもこちらにも転がっている。ひどいところは十歩おき位にある。新しいの

から古いの、柔らかいのから固いの、大きささまざま、なかには人がふんづけたものもある。

突然、サクレ＝クルールのドームが坂道の奥に現われた。ぼくが本のカットに使ったことのあるいかにもパリの風情のある手すりのついた石段をのぼりつめると寺院の横手に出た。寺院の中に入り、人並みに礼拝をすませ、敬虔な気分になって表に出ると、そこにはもうすでに夕日に赤くそまったパリの街が一望のもとに開けていた。観光客の群がる丘の上から見るパリの美しさにうたれて、しばし立ちつくしていた。やがて、おびたしいスズメとハトを見ながら正面の石段をおりてくると、鳥に餌をやっている老人に気がついた。彼の足許には無数の鳥が集まっていた。老人が空中に餌をパッとまいた。するとスズメがワッと飛び立って老人を包んだ。数十羽のスズメが老人を球の中心に包み込む恰好になったのだ。それはほんの数秒の美しい光景だった。輪がとけると老人の肩や腕にいっぱいのスズメがとまっていた。なかには手にもった餌をつついていっているものもある。人間の手から餌を食べるスズメなど日本では考えられないことである。これには少し説明がいる。日本にはスズメ *Passer montanus* とニューナイスズメ *Passer rutirans* がいる。人家付近にいるのは



スズメである。一方、フランスには日本と同種のスズメとイエスズメ *Passer domesticus* とがいるが、イエスズメが人家付近にいて、スズメの方は人家には近寄らない。同種のもが地域により、人家の近くにいたり、離れていたりするのは珍しい例である。だから、日本人に身近かなのはスズメであり、フランス人に身近かなのはイエスズメなのである。ところで、スズメは絶対と言ってよいほど人に馴れないが、イエスズメはそれほどでもないので、しばしば誤解を生む。ヨーロッパでスズメが人に馴れた話をよく聞かすが、それはイエスズメの方である。こうしたわけで、ヨーロッパを旅した日本人がこのような光景を見て、ヨーロッパ人に比べて日本人は動物愛護の心が足りないといって嘆くのは的はずれなのである。それにしても、その後、フランスを旅行しながら、ここで見たような光景に二度と出くわすことはなかった。

少し疲れのてきた中年男には、あまりにも刺戟の多い一日だった。パリの第一夜は、文字通り身も心も疲れ果て、泥のように眠り込んだ。

ぼくは昨日、強く印象づけられたこと、つまり黒人やアラブ人が、老人が、そして犬の糞がやたらに多いことを改めて、一夜明けた確かな目で見とどけた。

黒人やアラブ人の問題については、アルジェリアが独立したあたりから急に多くなったようである。フランスの工業はこれら外国の移民によって支えられている面も大きい、それには限度があるわけで、いくらでも必要なわけではない。だから、フランス人の失業者が百万を越えたという昨今では、そう職もみつからなく、フランスに行けば何とかかなという漠とした期待を持ってやってくる人たちは下積みの仕事にありつけるのがせいぜいで、職にありつけない

人が大勢いるという。東駅に女や子供、老人を含めたアラブ人たちが何となく不安そうにしていたが、彼らはパリでは働き口がなく、地方へ流れていくらしい。後になって、旅行の先々で見受けたから、彼らはフランス全土に広がっているのだろう、なかにはどうにもならなくて物乞いしているものもいる。マルセーユでは子供を抱えた女に小銭を与えたことがある。

フランス人は犬が好きであるということ、これは昔からそうだったのだから別に変わったことはない。しかし、以前はこんなに糞はなかったと十年前のパリを知っている人は言う。では現在はどのようにしてこんなにきたなくなってしまったのか。先にも述べたように、フランスの植民地や旧植民地から、黒人やアラブ人がどんどん来るようになった。この人たちに職を与えなくてはならなかったが、初めのうちはまあまあ職はあった。次第に数がふえるにつけ、それも不可能になってきた。結局、職業に貴賤はないというものの、あまり上等でない職にありつくことになり、以前そういう仕事をしていたフランス人にとって替ってしまったのである。このことと犬の糞とは関係ないはずだが、実は大ありなのだ。彼らの職のうちに道路掃除というのがある。パリの道路はうまくできていて、車道の端に水が勢いよくでる蛇口がある。朝早くほうきを持った掃除夫がやって来て、道路のごみをこの水で流してしまう。その汚水は道路の端に流れ込むようになっている。だから、パリの朝はきれいに水にうたれてすがすがしい、はずである。ところがそうでないのはなぜか。実はそこに人種差別がひそんでいるのである。つまり、おびただしい犬の持主は、アフリカ人が道路を掃除するようになって以来、犬に路上で平気で排便させるようになってしまったらしい。

一方、掃除する方は、低賃金の上、自分たちより優遇されている犬の排泄物だらけの道路掃除はいくらやとありついた職とはいえ面白くない。勢い熱が入らない、というわけである。実際、見ていると実にいかげんにやっている者がいる。ごみなどいっしょに糞をはき転がすわけだが、掃き残しはいくらでもある。所々に、ふみつけられた糞があり、その先には決して二、三か所、こすり付けた痕が続く。そんなのは水をつけてごしごし流さなければとれっこないのにただのごみと同じようにほうきで上をかすだけである。だから、糞は一度踏まれたら最後乾いて粉になり、風にも飛ばされない限りこびりついてることになる。糞だけでなく、小便もやり放題だから、小便臭いところもあり、至る所にしみができていく。フランス人は立小便をしないということだから、壁についたしみは犬がつけたものらしい。犬にしては位置が高いと思われるものもあるので怪しいが、目撃したわけではないから、フランス人の言うことを信じるほかはない。

犬の糞は多い少いはあるが、パリのどこにでも見られた。名だたる名所旧蹟にさえ、犬が入れる所は



どこでもである。シャンゼリゼに名店街のような所がある。きれいなカーペットが敷きつめられていて、高級店が並んでいる。そこに愛玩犬を連れて婦人が入って来た。いったい、犬がもよおしたらどうするのかと興味をもってしばらく様子を伺っていたが何事も起らなくてがっかりしたが、カーペットにそれらしい汚れがあったのを見ると、時々、やっってしまうものもいるらしい。注意して見ていると結構現場が見られた。犬が他人の自動車にひっかけても主人は平気で見ている。特別な例だと思うが、モンマルトルの盛り場では果物屋の屋台の脚に小便をかけているのを犬の主人も果物屋の主人も知らぬ顔をしている。別の店の前では放れ犬が糞をしているのを店のおやじは別に気にも留めていない風だった。ぼくがパリを去ろうとした朝のこと、右肩にカメラ類を詰め込んだショルダーバックをかけ、左手で20kgもある車つきのカバンを転がして、タクシーを探しながら坂道をよたよたおりに来た時ほど、このいやらしい忘れ物を呪ったことはなかった。腕が抜けるほど重いカバンを持ち上げたり、向きを変えたりで、後にも先にもこんな閉口したことはなかった。

糞については以後、ことあるごとにフランス人に意見を尋ねることになる。聞かれた人は必ずいいとは思っていないと答えるものの、どうしようもないらしい。日本では、多くの人が犬の散歩には袋を持って行くと何べん彼らに言ったか覚えていないほどである。また、日本ではよく見受ける「犬の糞は飼い主が始末しましょう」式の看板はどこにも見当たらなかった。

花の都、芸術の都パリも、その名に恥じないのは目から上だけ、目から下は汚ない街、これがぼくのやや誇張ぎみのパリの印象である。

フランス旅行中、フランス人と犬との関係には驚いたり、あきれたり、感心したり、様々な思いをしたものだ。糞尿についていえば驚いたとあきれたの部に入るだろう。犬に関する限りぼくにはどうもフランス人が理解できない。

9月4日午後、「動物の生活」社を訪れた後、近くのブローニュの森を散策した。実に広大な公園で、まだ野生の獣が棲んでいるという。野鳥の種類も多い。静かに憩う人、ペタンクやボートに打ち興ずる人、散策する人などそれぞれ楽しんでいる。のどかな風景である。ところで、いる、いる、びっくりするほどの犬である。ここでは拘束から解放され、自由にとび回っている。愛玩犬から番犬まで、大小様々な種類である。日本の公園では目のとどく範囲には、せいぜい一、二頭見かける程度なのに、十数頭あるいはそれ以上入ってくる。大きな犬がそばに来た時などは思わず足がとまってしまう。糞をふまないように注意して、草の上に坐って観察してみる。自動車が停車してドアが開くと、まっ先に犬が飛び出してくる。じっとみているとそういう車が実に多い。すると公園内の道路にぎっしり駐車している車の多くは犬の散歩に来たものかもしれない。犬が多



いはずである。

そうこうするうち、そんなに犬がいるのに、喧嘩が一向に起こらないのに気がついた。そんなはずはないと思いながら、その後注意していたがやはりそうである。これには驚いた。

やがて、一頭の犬が池の中に飛び込んで水鳥を追い始めた。池の中ほどまでいって、あきらめておかにあがって毛の水を払った。ちょうどそこに、ひとりの老婦人がいすに坐って鳥に餌をやっていた。その婦人にその水がまともにかかってしまった。そこへ犬の持ち主の婦人がかけつけて来て犬に何か言ったようだった。しかし老婦人には何も言わずにそのまま犬といっしょに立ち去ってしまった。老女は黙々とからだにかかった水を払っていた。離れた所で見ていたので声を出したところで聞えなかったに違いないが、何かあいさつがあったとはどうしても思えなかった。フランス人はちょっとしたことでもすぐ「バルドン」を言うのに、これはどうなっているのだろう。

ブローニュの森を出てグラン＝タルメ通りを凱旋門に向かって歩いていた。疲れたので歩道のわきにある柵なしの、どうみても芝生とは思えない草地に坐って道行く人を眺めていた。大きな犬が二頭、同じ地続きで遊んでいた。しばらくすると、黒人の警官が少し離れた所からぼくに手で何か指示した。どうも草地を出ろということらしい。ぼくは苦笑せざるをえなかった。犬は放っておいて人畜無害の人間を追い払うとは。

あれほど犬がいるのに犬が人にかみついた例はほとんどないという。信じられないことだがどうもほんとうらしい。「らしい」というのはぼくは信じているわけではないからである。フランス人に東京では犬による咬傷事件が年に2000件以上もあり、咬み殺される例も毎年起っているという、信じられないと言い、しつげが違うからと鼻を高くする。ぼくのホテルにも中型の犬がいたが、初めうなっただけ後はぼくをずっと無視していた。ストラスプールで立ち話をしている婦人の連れの犬が相手にしきり

に吠えかかっているのを見たが、旅行中に犬が人間に攻撃的になっているのを見た唯一の例である。

フランス人は犬を室内で飼っていることが多い。庭のないアパートなら仕方がないが、庭があってもそうしていることが多いらしい。アルザス地方のセレストアという小都市のホテルでのこと、朝ホテルの食堂に行くと、十人位のハンターが猟犬を連れて食事をしていた。犬どうしはなかにはいがみ合うのもいて、飼い主がはげしく殴打するというひと齧もあったので、やっぱりフランスの犬もけんかをするところがあると分り安心したのだが、きれいなレストランに十頭もの犬を連れこんで平気なのは、レストラン側にもハンター側にも恐れ入った。さらに驚いたことには、どうもこの犬たちがホテルの室で寝た形跡があることである。食後ぼくの部屋の前の廊下で、犬を連れてハンターに出会ったのだから。そのホテルは町で一番上等なホテルだった。また電車の中もよいらしく、犬連れの人をしばしば見受けた。ある時、大きな犬を連れて男がぼくのコンパルチマンに入りかけた。たまたま一緒になった日本人留学生夫婦がこれだけはどうにもがまんができないと言っていた。というのは、ぼくたち三人で、フランス人の衛生観念や例の糞の話などしてフランス人の悪口を言っている時に入って来たからである。

フランス人はこうしてみると、犬が好きだなあつくづく感心する。

ところで、これほど犬の好きなフランス人のなかの多くの人がヴァカンスには犬の始末に困って捨てていってしまうということの真疑を確かめることがこの旅行の目的の一つでもあった。しかし、ぼくがフランスに来た時はヴァカンスも終りに近かったから、犬捨ての現場を目撃することはできなかったが、噂通りとすれば、当然野犬がいてもいいはずなのに少しも情報が入らなかった。これはふしぎでならない。ある時期に集中して犬を捨てながら野犬がいな

いとはどうも理解しがたいことだった。

ところで、数年来、フランスでは狂犬病が盛んに取りざたされている。キツネが媒介するとされ、発見次第殺されている。ところが動物保護者や団体は、キツネではなく他の動物であるとし、キツネの虐殺には強く反対しているのだが、ここでも野犬は出てこない。実は、フランスでは犬による狂犬病は例のパスツールが血清を発明したことにより、今世紀の初めには姿を消していた。ところが1967年から1968年にかけて、突然発生した。今度のは犬が原因ではなく、キツネが媒介するとされてしまったわけである。

確かにフランスは野犬は少ないことは間違いないようだ。その理由として考えられるのは、日本人は犬を捨てる時は遠くへ連れて行って置き去りにする。後でこの犬が野犬になって社会に迷惑をかけることになるかも知れないというようには考えない。フランス人は役所が回収に来るので木にくくって、放置しておく。犬にとっては生きのびる可能性は少ないから、後になって社会に迷惑をかけることはないと考えからなのかも知れない。つまり、両国民の考え方の相違が野犬の多少の原因になっているものと思われるのである。これは何となく分る。しかし、犬のしつけにそれほど気を配らない日本人が犬の後始末をするのに、犬どうしが喧嘩もしなくなるほどきびしくしつけるフランス人が後始末もしないで平然としている…この辺がぼくには釈然としないのだ。

注記1:1950年9月1日から誌上で高橋さんの「フランス動物紀行」が始まった。その中から抜粋し加筆、修正し紹介した。

注記2:使用した写真説明・中世に建てられた多くの石像の十字架は、旧道沿いの村の入り口に今でも残されて旅人の安全を祈っている。

注記:編集



ジェヴォーダン
狼公園にて